

着物について考えてみました

私の知っている料理屋の女将さんは、以前フランス旅行に「着物(和装)」で行ったそうです。飛行機はエコノミーです。直行便で12時間かかります。女将さんにとっては「苦」でもなく日常的なことの一部分です。それどころか、ヨーロッパのような歴史のある国々では、宿泊先のホテルへ自国の民族衣装で訪れた人はチェックイン時に頼んでもないのに1ランク上の部屋、もしくは景色の良い部屋に変更してくれるそうです。もちろんサービスです。レストランを訪れても同様のサービスを受けるそうです。民族衣装は国旗と同じで「敬意」を持たなければならないと言うのが「大人の国」の振る舞いのように。安倍晋三総理も、次回サミット等へお出かけの際は是非「紋付羽織袴」の出で立ちで政府専用機からタラップを降り、各国の要人と交渉して下さることをお勧めいたします。強面のプーチンにも負けないと思います。



話は変わり、私のお寺の本堂が全部椅子席に代わったのが30年程前です。当時、膝が痛くて正座、もしくは畳に座っていることが困難になった人が急に増えたからです。

日本人の生活スタイルが西洋化したと言いつつ100%そうなった訳ではありません。完全に椅子の生活ではありません。家に帰りリラックサしてテレビを見る時など畳の上で寝ころがってゴロゴロしたりします。筋肉を完全に緩



めくつろぐ振る舞いは農耕民族を御先祖に持つ者の「性」だそうです。狩猟民族は獣に警戒してすぐ動けるよう腰掛けの生活で筋肉はいつも緊張しているそうです。そうしていると間もなくトイレに行きたくなります。その時立ち上がる今のあなたの姿を想像してみてください。両手をついて「どっころしよ」と無造作に且つ横着に立ち上がると思います。これは洋服を着用しているから出来る所作であります。重力に逆らって立ち上がる動作によってお尻から上半身の全体



重が一気に膝にのしかかります。毎日の積み重ねで知らず知らずに大きなダメージになります。これが着物を着ていたとしたらどうでしょう。「よっころしよ」の所作では裾がはじけてしまいます。同じように寝ころがっていたとしても、立ち上がる際はいちど座り直し正座をし、先ず両足の指を立てからゆっくり膝を上げていくことになります。着物が作る動作の制約によって膝が守られているのです。着物あつての畳の生活が存在するのです。そう言えば、着物で仕事している坊さんも膝で不自由している人が少ないこともうなずけます。

このように着物は先人の知恵がたっぷり詰まっています。お腹の三角地帯は二重になり冷やさず、帯は無意識に姿勢を整えてくれます。またモデルさんにも共通する美しい歩き方に導いてくれます。一年に一度は着る日があっても良いと思います。

俊徳丸